ラティガンを見る
― テレンス・ラティガン主要 3 作品の映画化に探る ＜孤立＞から＜自立＞までの道のり ―

広　川　　治

序論：ラティガン作品の上演

2005 年の「ラティガンまつり」～主要 3 作品の翻訳上演

約半世紀前に英国の劇壇の中心にいた劇作家テレンス・ラティガン（Terence Rattigan, 1911 ― 1977）。2005 年の 9 月から 12 月にかけて、東京の演劇ファンは、20 世紀英国を代表するこの劇作家の代表作を 3 作品続けて見る機会に恵まれた。鈴木裕美企画、自転車キンクリーツカンパニー製作によるテレンス・ラティガン 3 作品の連続上演「ラティガンまつり」は、上演のための新訳と好スタッフ、キャストを得て、「ラティガンの作劇のうまさと、人間を見る目の確かさに改めて脱帽する」（朝日新聞）[(1)] というような高い評価を得たばかりでなく、外国戯曲の優れた翻訳と上演に与えられる湯浅芳子賞（第 13 回、戯曲上演部門）の受賞という成果までもたらした。

このラティガン連続上演の第 1 作となったのは、『ウィンズロウ・ボーイ』[(2)] で、演出は社会派の劇作家であり演出家の坂手洋二であった。地雷をめぐる様々な人間群像を描いた『だるまさんがころんだ』（2004）など、坂手自身の作品は、登場人物や状況にユーモアを感じさせながらも、深刻な問題の核心を的確に描いていく事が多い。『ウィンズロウ・ボーイ』でも、事務弁護士デズモンド役の大石継太のコミカルな演技や、中田喜子のおっとりとした母親役のユーモアなどで観客を笑わせながらも、息子の無罪を訴える家族の劇が、個人と社会の関係を考えさせる作品に仕上がっていた。

2 作目の『ブラウニング・バージョン』[3] は、今回の連続上演を企画した鈴木裕美の翻訳、演出で、自然で親しみやすい日本語に訳されたその台本は、『せりふの時代』に掲載された。[4] クロッカーハリスは、テレビドラマ『僕の生きる道』（2003）で教頭先生役に扮したことがある浅野和之。浅野は苦渋に満ちた面持ちでこの退役教師の葛藤を演じ、教え子のジョン・タプロウからプレゼントを渡された時には、床にくずれるように膝をついて泣き出し、観客の涙を誘っていた。浅野はこの作品を初めとする 2005 年の活躍により、読売演劇大賞の最優秀男優賞および紀伊国屋演劇賞を受賞している。

最後の『セパレート・テーブルズ』[5] を演出したのは、劇作家、演出家のマキノ・ノゾミである。『東京原子核クラブ』（1997）などの群像劇に人生の味わいを見せ、『高き彼者』（2000）で元教師と若者の心の交流を描いており、ラティガンの劇の演出には打って付けだったと言えよう。雛壇のように立体的な段差のあるステージにテーブルが配置された抽象的な食堂のセットが後方に組まれ、前方にはいかにも英国調の高級感のあるソファや椅子が置かれ、写実的な空間が作られていた。第 1 幕では、『ウィンズロウ・ボーイ』を演出した劇作家の坂手洋二がジョン・マルコムを、数多くの翻訳劇で魅力を放ってきた神野三鈴がアンを演じ、大人の男女のほろ苦い時間と空間が生み出されていた。2 幕目では、シビルを山田まりやが、ポロック少佐を菅原大吉が演じ、それぞれ人生に臆病な男女の不器用さを器用に見せてくれた。ミス・クーパー役の久世星佳の落ち着きぶりから、ユーモアあふれる物言いの小飯塚貴世江のウエイトレスに至るまで、キャストのアンサンブルの良さをマキノ演出は見事に引き出していた。

上演後のポストトーク

この「ラティガンまつり」の成果は、上演だけではなかった。『ブラウニング・バージョン』と『セパレート・テーブルズ』では、出演者や演出家等の座談会が上演後にポスト・トークとして催された日があった。『ブラウニング・バージョン』10 月 25 日の公演後の主な出演者によるポストトークで

は、翻訳について鈴木が、アンドルウが単にヒムラーと呼ばれているところを「ヒトラーの副官のハインリッヒ・ヒムラー」とあえて説明を加えて訳したと解説。その上で、ヒムラーはイギリスの捕虜収容所で服毒自殺で死んでいるので、イギリスの初演の観客は、薬の場面でアンドルウもまさかと思ったのではと分析。さらに、アンドルウとミリーの関係については、劇中の戯曲『アガメムノン』と比較すると、長女のいけにえに相当するのは、子供がいない、作らせてもらえなかったという事で、ゲイではないが精神的な愛を求めた夫と、肉体的な愛を強く欲した妻の大きな溝が不和の原因の一つではないかと指摘した。(6)

ミリー役の内田春菊に対しては、観客から、「ラストの夫の校長への電話を聞いて、ミリーはどういう気持ちだったでしょうか。夫に変化が見られた事がうれしいという気持ちが彼女の反応なのでしょうか？」という質問があった。今回の演出では、最後に電話を置いたアンドルーが、食堂へ通じるドアを開けてミリーを招くようにして、「さあミリー、食事にしよう…」と最後のセリフを言うのである。しかもその際の浅野の表情は堂々とした威厳に満ちた表情になっており、ミリーは夫に呼ばれて激しい感情があふれた顔を手で押さえるのである。この最後の場面について内田は、「稽古中、その場面で実際に泣いてしまったことがあった。昔の夫を見たような感じ。」とミリーとしての心境を述べ、鈴木は、「20 年前生き生きしていた彼が帰ってきて、もう一度プロポーズしているようなラスト」という新鮮な解釈を披露していた。

12 月 18 日の『セパレート・テーブルズ』の公演終了後にも、ポストトークが行われ、鈴木を中心に、演出のマキノ、アンの神野、ミス・クーパーの久世星佳、シビルの山田まりやの 5 人が、作品と作家の世界について意見を述べ合った。神野は、「本当の自分があまり好きじゃないから。」「スープは結構。」「私は本当は臆病。」など、アンと少佐は同じようなセリフを言っていて、感情移入しやすく、「途中でジョンに顔を抑えて見られる場面は、テネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』（1947）のブランチに近い

と思った。」と演じた感想を述べた。ウィリアムズとの比較に関しては、シビルが『ガラスの動物園』（1945）のローラに似ているという意見も鈴木から出された。作品からのメッセージを指摘していたのが久世で、作品を「広い意味で言うと成長物語」であると捉え、「1 幕は、思っている事を言えない人へのアドバイスで、2 幕では、少佐がシビルに真の事情を正直に話している。弱い人が毎日毎日、終わっているのではなくて、ゆっくりと進んでいる。」と思える作品であると指摘。これを受けてマキノは、「終わった時には、ここはいいホテルだと思えるような、場所自体も成長して見えるような舞台を目指した。」と言っていたが、実際、観劇後は、並べられた銘々のテーブルから人生の余韻が感じられるような舞台に仕上がっていた。

＜孤立＞から＜自立＞までの道のり

マキノノゾミは『セパレート・テーブルズ』のパンフレットの鼎談の中で、演出した作品は、タイトルに集約されているように、「銘々の人生があって、しかもそれは孤独をたたえている。オレは豪華絢爛な“孤独の見本市”って言ってるんだけど（笑）。」[7] と作品の本質について述べている。一方、坂手洋二も『ウィンズロウ・ボーイ』の劇場用パンフレットの鼎談の中で、「ラティガン戯曲ってひとことで言うと“痩せ我慢”なんですよ。」[8] と実にわかりやすい表現でラティガンの劇の本質を指摘している。いずれもラティガンの劇世界を明解に表わしている言葉である事に間違いないだろう。

この“孤独の見本市”と“痩せ我慢”という点は、言いかえれば、＜孤立＞と＜抑圧＞という主題である。Geoffrey Wansell も指摘しているように、ラティガンの頭に常にあったテーマの一つは、「感情の抑圧」（“the suppression of emotion”）であった。[9] 実際、*The Browning Version*（1949）の Crocker-Harris や、*Separate Tables*（1954）の Major Pollock や Sybil がそうであったように、ラティガンの主要な劇の中心にいるのは、自分を抑えたり、偽るなどして、周囲との自然な交流ができずに、本来の自己を心の奥に閉じ込めてしまって、精神的に孤立している人間である。そんな人物たちに、ラ

ティガンはつらい試練を与えつつも、劇中で成長させる。それは決して本人1人で成長できるわけではなく、周囲の共感、優しさや理解という手助けを得てこそである。その結果、＜抑圧＞が原因で＜孤立＞の状態にあった人物は、人間的な＜理解＞を得て成長し＜自立＞することができて、それが観客のカタルシスをもたらすのである。*The Browning Version* では、教師 Andrew Crocker-Harris が生徒 Taplow との交流や同僚 Frank の理解を得て、校長への電話という形で新たな自立を得ている。それは Andrew 自身の表現にもあるように、“a single success” (10) への道とも呼ぶ事ができる。*Separate Tables* でも、少佐と Sybil の食堂でのラストが、周囲の理解を得て自立できた“a single success”の瞬間を見事に描写していると言える。*The Winslow Boy*（1946）の場合も、Winslow 家という家族が社会的に孤立していく中、婚約者に対して姉 Catherine が当初、自分を抑えているが、やがて裁判への道を選び、自立の人生を選択していくところが描かれている。

このようにラティガンの主要3作品には、＜孤立＞から＜自立＞への道のりが描かれており、今回の上演にもそうした人間の葛藤は見ることができた。ではラティガンの映画化作品では、こうした人間の成長の道のりはどのように描かれているだろうか。ラティガンの劇の多くは映画化されているが、特にこれら3作の映画化は、作者自身が脚色者として製作に関わり、1940～50年代に白黒で撮られた評価の高い映画化である。本論では、これら映画化3作品を取り上げ、原作の主題や特徴が、スクリーンの上の演出や演技でどのように描写、表現されているか、それらの映像表現を確認しながら、ラティガンの世界の本質につながるものを探っていきたい。

1．映画 *The Winslow Boy*（1948）

Winslow 一家の幸福な日々

原作戯曲の London 初演が1946年。9ヵ月のロングランとなり、エレン・テリー賞を受賞。続くブロードウエイでの上演も好評で、2年間のロングラ

ンとなっていた最中に映画版 *The Winslow Boy* [(11)] は完成し、英米で公開された。[(12)] 監督は後に *The Browning Version*（1951）[(13)] も撮る事になる Anthony Asquith である。Asquith 監督は、George Bernard Shaw の *Pygmalion*（1938）や Oscar Wilde の *The Importance of Being Earnest*（1952）など、文芸作品の映画化を得意としており、ラティガン作品も他に *French Without Tears*（1940）と *While the Sun Shines*（1947）を監督している。

この 48 年版の原作と異なる主な特色は次の 3 点――①家族の幸福な日常生活の様子がプロローグ的に追加されて描かれている。② Arthur を中心に場面が展開していく前半部分があり、父親の家の外での行動や苦悩が丁寧に描写されている。③議会や裁判の様子の一部が具体的に描かれており、原作以上に弁護士 Sir Robert Morton が後半の場面の中心となっている――以上の 3 点を確認しながら、映画化の主要場面を見ていきたい。

原作はどの場も Winslow 家の居間という設定になっており、最初の場面も家にこっそりと帰ってきた Ronnie と女中の会話で始まっているが、この 48 年版では、Ronnie の事件が起こる数か月前の一日から始まり、様々な場所を舞台に物語は進む。オープニングは、駅のホームに蒸気機関車が入線してくる場面である。列車のコンパートメントにいた老紳士が降りる際に、同室にいた中年の紳士と会話を交わし、その会話から、このパイプを手にした老紳士が、仕事帰りの Winslow 氏という退職を迎えようとしている人物で、会話の相手は同僚であることがわかる。高級な住宅街の邸宅に戻った Winslow 氏を迎えるのは夫人の Grace で、夫に退職記念の懐中時計を見せてもらい、長年の勤労を誉め称える。その時、レコードの音楽が隣室から聞こえてきて、部屋を開けると長男の Dickie が曲に合わせてダンスの練習をしている。ここで原作にもある親子の会話が一部交わされ、息子は流行の音楽を嫌う父親に注意され、2 階の自分の部屋に引っ込む。続いて隣りの家から子犬が入りこみ、庭のテーブルで読書をしていた Catherine の足元に走り寄る。その後を追うようにブレザーを着た紳士が走ってきて、子犬を抱き上げて謝り、自分は隣に移ってきた John Watherstone であると自己紹介をする。

つまり映画は、Catherine と婚約者 John の出会いも描いているのである。次に Ronnie が海軍学校の制服を着て、晴れやかな笑顔で両親の前に登場。敬礼の仕方を父親に直され、入学準備完了の様子を見せる。すると場面は駅に変わり、列車の窓から顔を出して手を振る Ronnie を夫婦二人が見送るのである。

このように、一家の穏やかな日常を描く形で登場人物を紹介しているのが、ラティガン自身による脚色の第 1 の特色である。原作の 2 幕 1 場では夫人が裁判によって失われた平和な日常の事を、“a happy home and peace and quiet and an ordinary respectable life, and some sort of future for us and our children” (14) という言い方で表現しているが、まさにこの映画の冒頭は、そうした平和な毎日の描写である。

この後、映画は Ronnie の学校での毎日を追う短いショットが続いた後、原作の冒頭にある彼の予定外の帰宅場面となるが、平和な日常と Ronnie の不安が映像的に交互に並べられ効果を出している。原作では、Ronnie は突然の帰宅に驚く家政婦の Violet に、両親はどこにいるかと尋ね、日曜の朝の礼拝に行っている事を知らされる。映画では、Ronnie の帰宅場面の前と後に教会の場面が実際にあり、Winslow 家の 4 人と John の一家が教会で着席し、互いの一家を意識している様子が描かれている。中でも、後に婚約者同士とわかる Catherine と John の 2 人からは、笑顔で互いをチラッと見たりと仲のいい雰囲気が伝わってくる。だがその直後には、家の玄関ホールの椅子に座り、不安そうに待つ Ronnie の面持ちをカメラが捉える場面となる。Ronnie が考えこんだ末にポケットから封筒を取り出し、破いて中の手紙を読んでいる時、教会から家族が帰ってきてしまい、彼は驚いて裏口から庭の方へ出て行ってしまうのである。

このように、この映画では、なごやかで平和な家族の日常、特に若い二人の婚約に関する幸福な場面が、原作にはない場面も加えられて丁寧に描かれ、Ronnie の突然の帰宅という深刻な場面と対照をなしている。

行動する父親の姿 ～ Arthur の決意と苦悩

この後、原作の 1 幕 1 場に相当する箇所では、戯曲と同じように John の来訪や Ronnie の帰宅が明らかになる場面などの室内の場面が続く。Ronnie が父親と二人だけになり、自分は盗んでいないと誓う場面が最初の見所となるのは、劇も映画も同じである。だが、この映画が劇と異なるのは、この親子二人だけの場面の最後、Ronnie が部屋を出て行った後の場面の終わり方である。原作では、息子の言葉を信じた父親が早速電話を取り、Ronnie の通っていた海軍学校へ長距離電話を申し込む台詞で終わっている。これに対して映画では、Arthur は昼食を待っていた家族と Catherine の婚約者のいるダイニング・ルームに入る。すると夫人が肉料理を切り分けてくれるように夫に頼み、彼が微笑んでナイフを手にしたところで場面が終っている。ここでは、息子の無罪の言葉を信じた父親が、自分の決意や考えをすぐに表明することを控えて、家族の平和な雰囲気を壊すことなく日常に戻っていく姿を見せているのである。

続く 1 幕 2 場に相当する場面では、Arthur が海軍学校、大臣の事務所、国会議事堂など、息子の無罪を明らかにするために様々な場所を訪れる場面が続いており、息子を守ろうとする父親の実際の努力が描かれている。そういった中でも、劇場でミュージカル・レビューの歌と踊りを楽しむ Catherine と John、それに Winslow 夫妻の場面が、やはり深刻な場面の間に幸福な家族の場面として挿入されている。(15) だがこの場面でも、劇場 2 階のボックス席の前列で楽しそうに舞台を見ている二人の後ろに座る父親は、杖に顔を傾けて下を向いて考え事をしているのである。彼は途中で Catherine が舞台に笑いながら後ろを振り向くと、娘に合わせて笑顔を作ってみせたりもする。おそらく Arthur の頭の中は、Ronnie の問題で一杯だったのだろうという事を思わせる表情の変化である。彼はこの劇場のロビーで会った事務弁護士の Desmond に、息子の件を話して協力を願うのである。Laurence Olivier 監督・主演の *Richard III*（1955）で、王 Edward Ⅳを演じていた名優 Sir Cedrick Hardwicke が、この行動する父親の苦悩の内と外を見事に表現して

いる。

Sir Robert Morton と議会、裁判場面

こうして、劇前半のクライマックスとなる Sir Robert Morton の来訪の場面となる。彼の来訪から訴訟を引き受けると表明する場面の最後までは、ほぼ原作の台詞通りに展開していき、10 分以上も同じ室内の場面になるのだが、決して単調な屋内場面になることなく、Ronnie を問い詰めていく様子が緊迫感をもって描かれている。ここでの最大の功績は Sir Robert を演じている Robert Donat だろう。*Gone With the Wind*（1939）の Rhett Butler 役で Clark Gable が候補になっていたにもかかわらず、*Goodbye, Mr. Chips*（1939）でアカデミー賞主演男優賞を受賞した実力派である。ほとんど無表情で目を他人と合わせず、冷淡な物言いで終始語っている様子からは、人間的な暖かさがひとかけらも感じられず、Catherine が過去の訴訟に関して彼を非難し、冷血漢と呼ぶのもまったく無理はないと思わせる演技なのである。しかしそれだけに彼が、“The boy is plainly innocent. I accept the brief.” (16) と言って退室する時、その意外性が際立ったものになっている。また映画の後半では、一見冷たく厳しいこの弁護士の人間的な面が徐々に見えてくるなど、演技の深みというものが Donat からは感じられる。

映画の後半の主軸になっていくのは、この Donat 扮する Sir Robert の議会、裁判所での場面である。原作劇では台詞や新聞記事の朗読の中で伝えられるだけの議会、裁判の模様だが、この映画ではその様子を見ることができる場面が用意されている。たとえば原作には、婚約者の John の父親から、国全体の笑い種である裁判をあきらめないと結婚は認めないという内容の手紙が家に届く場面がある。原作では Sir Robert が家に来訪中の事なのだが、映画では家で手紙を見た二人が国会議事堂まで赴き、そこで Sir Robert に面会して裁判を開くための議会での訴えをあきらめると話すのである。結論が出ないまま、Sir Robert は議場に戻り、Arthur も Catherine も傍聴するのだが、ここで Sir Robert は他の議員が演説の最中に、用紙の裏に何か走り書きをして、

向い側にいる海軍大臣に送り渡す。大臣はこのメモに何かを書いて返してよこすのだが、この後 Sir Robert は、この大臣が演説中に突然立ち上がり、開いていた本をバタンと閉じて議場から黙って出て行ってしまうのである。

数場面後には、今度は Sir Robert 自身が議場で熱弁をふるっており、賛同を表明する多くの議員の“Hear! Hear!”という掛け声が高まり、情熱的なスピーチは“Let Right be done.”という言葉で締めくくられる。こうなるとその直後に大臣が反論しても、議場全体の攻撃の的になってしまうだけである。野次と怒号の中で大臣は何とか反論をしようとあがくのだが、この時、大臣を見ていた Sir Robert の手元に置かれているメモをカメラはアップで捉える。それは先程、大臣から送り返されたメモである。そこには、“Let Right be done.”と書かれた文が線を引かれて消されており、その下に“Imports idle.”（バカバカしい）と嘲笑ったように言い返した言葉が書かれている。Sir Robert は、この侮辱に憤慨して、反旗ののろしをあげていたのある。

この後、議会によって裁判が認められ、一家は裁判の道を進むことになるわけだが、裁判場面では、Ronnie が喚問されて証言台に立ち、相手方から改めて厳しい質問を浴びせられる場面もある。ここでは、法廷用のかつらをつけた Sir Robert が彼を弁護して必死に弁舌を再び振うばかりでない。一人でロッカー・ルームで何をしていたのかという問いに窮した Ronnie に対し、タバコを吸い終わった時に吸殻はポケットにでも入れたのかと、彼は故意にさりげなく尋ねる。これに対して Ronnie は、「違う場所に…」と釣られて言いそうになってしまい、周囲の失笑を買うのだが、この事から Ronnie はタバコを隠れて吸っていたにすぎない事がわかるのである。

原作と映画のラスト ～ Sir Robert と Catherine の会話

この他にも多くの証人の弱点をついていく Sir Robert の弁護士としての腕が披露されていくが、判決場面は原作と同様に描かれる事はない。Ronnie の潔白が証明されたことを駆け込んで伝えるのも、家政婦の Violet である。それに続く Sir Robert の訪問で、判決の詳細が明らかになり、最後は彼と

Catherine の別れ際の会話で劇が終わるのも原作と同じである。ただし二人の会話の内容と余韻は微妙に異なっている。原作では、婦人参政権運動を進めている Catherine が対等な立場として将来、議会で再会したいと言う次のような会話で幕となっている。

SIR ROBERT. Good-bye, Miss Winslow. Shall I see you in the House, then, one day?
CATHERINE. (*With a smile.*) Yes, Sir Robert. One day. But not in the Gallery. Across the floor.
SIR ROBERT. (*With a faint smile.*) Perhaps. Good-bye. (*He turns to go.*) (17)

これに対して映画では、別れの前にタバコを付け合って吸い、Sir Robert が自分がタバコを吸うのは特別な機会だけだと述べ、二人は一瞬見つめ合う。そして映画は、次のような二人の言葉で終わるのである。

SIR ROBERT. You still pursue your feminist activities.
CATHERINE. Oh, yes.
SIR ROBERT. Pity. It's a lost cause.
CATHERINE. How little you know women, Sir Robert! Good-bye, I doubt that we shall meet again.
SIR ROBERT. Oh? Do you really think so? How little you know men, Miss Winslow. (18)

ここで Sir Robert は、再び抑え気味ながらも、自分への誤解を解くことができた Catherine に対して、またいつか会いたいという自分の本音を言葉ににじませているのである。

こうして見てきたように、映画 *The Winslow Boy* では、父親 Arthur は息子の事件に頭を悩まし、行動を起こしながらも穏やかな日常の平和を崩すこと

なく、長女の婚約を祝う笑顔を見せていた。それはまさに英国紳士らしい“gentle”な態度であったと言えるだろう。同様に弁護士 Sir Robert Morton も、自分の真の感情を抑えたその物腰が Catherine に誤解されつつも、裁判を推し進めて一家に解放感をもたらしていた。だがそれは、自分自身を解き放ったのと同じ事でもあったと言える。このようにラティガンは、原作の人物の抑えられた感情を改めてスクリーンに解放して成長させているのである。

2. 映画 *The Browning Version*（1951）

Andrew Crocker-Harris の“stoicism”

文学作品で映画化に向いているのは、長編小説や数幕ある戯曲ではなく、短編小説や 1 幕劇であるとよく言われる。なぜなら普通の長編や戯曲では、多くの章や場面を要領良くカットしたとしても、駆け足で物語が展開していくような印象を与えてしまう危険性が高いからである。だが短編や 1 幕ものならば、原作を丁寧に映像化できるうえに、新たな場面を追加して、物語や人物に深みを与えることができるからである。その例としては、Noel Coward の 1 幕劇 *Still Life*（1936）を David Lean が監督した *Brief Encounter*（1945）や、Peter Shaffer 作 *The Public Eye*（1962）の Carol Reed 監督による映画化 *Follow Me!*（1972）、最近では、E. Annie Proulx の短編小説を Ang Lee 監督が映画化してアカデミー監督賞を受賞した *Brokeback Mountain*（2005）などを挙げることができるだろう。

1951 年版の映画 *The Browning Version* も、*The Winslow Boy* と同じ原作・脚本と監督のコンビが作った 1 幕劇の映画化の成功例と言える。この映画の DVD の特典映像には、後に Albert Finney 主演で *The Browning Version* を再映画化した監督 Mike Figgis が、原作や旧作の映画について語っているインタビューがある。[19] Figgis 監督は主人公の Crocker-Harris について、この退役教師が興味深いのは、彼が“an incredibly passionate man who was stoic”であるからだと説明している。まさにその通りで、ラティガンが描いているのは、

情熱を内にしまいこんだ教師の“stoicism”の物語なのである。Crocker-Harrisは、自分を＜抑圧＞し、周囲から＜孤立＞している人間なのだが、彼には彼流の生き方の美学とプライドがあり、安易な迎合は考えていない。

このstoicな主人公をスクリーンに追って行くにあたり、ここでは映画化の3つのポイント ― ①映画オリジナルの学校場面　②置時計の針を直すようなCrocker-Harrisの几帳面、かつ冷静な性格な描写　③追加場面として最も注目すべき終業式のスピーチの場面 ― 以上の場面を中心に、主役のMichael Redgraveや、他の俳優の対照的な演技、追加場面の描写などによって、いかにCrocker-Harrisの“stoicism”が表現されているかを中心に探っていきたい。

学校の場面 ～ Taplow少年から見た“The Clock”

日本における演劇映画比較研究の先駆的研究書である荒井良雄著『イギリス演劇と映画』には、シェイクスピア、オスカー・ワイルド、バーナード・ショー、ノエル・カワードと並んで「テレンス・ラティガンと映画」の章が設けられており、*The Browning Version*の戯曲と映画が比較されている。その分析によれば、映画の冒頭、遅れてチャペルに入ってくるWilsonという生徒は、怠け者でCrocker-Harrisに目をつけられていて、彼を嫌っているのだが、「原作のタプローを二分して、生徒の悪い面をウィルソン、純情な面をタプローに演じさせたので、ラスト・シーンの校庭における老先生とタプローの別れの場面で、感動が静かに盛り上がる。実に巧みな脚色」(20) なのである。

生徒らは遅刻にうるさいCrocker-Harrisの事を影で“The Crock”と呼んでいるが、そのThe Crockについて、このWilsonとTaplowが他の二人の生徒と授業前に教室で雑談をしている場面がある。Crocker-Harrisが心臓の病気が原因で学校を退職するとTaplowから聞いて、Bryantという生徒は、The Crockにハートなんてあったのかと笑いとばす。するとWilsonは、病気の彼は映画みたいに最後は教室で死ぬかも、と残酷な発言をする。だが

Taplow だけは冷静に彼を分析し、ただうるさいだけの他の先生とは違うとしたうえで、同情の気持ちも口にするのである。

TAPLOW: He can't hate people, and he can't like people. And what's more, he doesn't like people to like him.
WILSON: Well, he doesn't have to worry much about that.
TAPLOW: Oh, I don't know. If he'd give me the chance, I think I'd quite like him.
BRYANT: What?
TAPLOW: Well, I'd feel sorry for him, which is more or less the same thing, isn't it?
WILSON: Sorry? Sorry for the Crock? (21)

このように Taplow が他の生徒と違うことが示された直後、The Clock の登場となり、授業場面となる。彼が教室に入ってくるだけでクラス全体が静まり返り、誰一人私語することなく進む厳かな授業である。Taplow は先生の引用したラテン語の警句に意味がわからなくても笑ってみせるが、前に呼び出されて警句の意味を皆に解説するように言われてしまう。これは原作で、Taplow が Frank に授業の様子として語り伝えていた話から映像化されている場面である。意味はわからなかったが礼儀だと思って笑ったと彼が答えると、礼儀を見せたいなら、あまりひどい作文は以後しない事だと皮肉たっぷりに言われてしまう。そして席に戻ると隣の机の Wilson に、"Sorry for him now?"と聞かれてしまうのである。こうした授業風景からは、Taplow が語っていたように、Crocker-Harris は生徒から好かれていないだけでなく、好かれたいと思っていない教師であるような雰囲気が伝わってくる。

彼のクラスの張り詰めた空気と対照的なのが、隣の教室から聞こえてくる笑い声、興味津々の実験をして、生徒から好感を持たれている Frank Hunter の教室からの声である。実際にその楽しそうな化学の授業の様子は、

Crocker-Harris の授業場面の前に描かれているが、まだ授業時間が 10 分残っていても早めに切り上げて、生徒を解放してしまう様子も描かれている。だが Crocker-Harris のクラスは、宿題を各自やり直させていて、正確な時間が来るまで決して授業は終わることはなく静寂が続く。早く終わったクラスの生徒の足音や声に、思わず腕時計を見たりする者もいるが、Wilson などは教室の壁の時計を見たところを Crocker-Harris に見つかってしまい、あと 9 分半で時間が足りないなら、いつまでも待っててもいいんだぞ、と皮肉を言われてしまう。最後にクラスの代表がノートを集めて提出しても、The Clock は授業の終了を知らせる鐘の音が完全に鳴り終わるのを黙って待ち、ようやく“Very well. You man leave.”という彼の言葉で授業は終りになるのである。こうした息の詰まるような授業の後では、教師が最後の授業として別れの言葉を一言、生徒たちに伝えても、感情的な反応は何も帰ってこない。ただ儀礼的に“Thank you, sir. Good-bye, sir.”と言って、彼らは教室を後にするのである。

置時計の針を直す“The Clock”

Crocker-Harris の時間に厳しい几帳面な性格が描かれているのは、学校の場面ばかりではない。Frank と Millie のいる部屋へ戻ってきて、時間割の話をしている時にも、チャイムの音を聞くと、部屋の隅にある置時計の針を直している。さらに、Taplow の補習が終わり、Frank も帰った後に、Millie と黙って昼食をとる場面が映画にはあるが、テーブルで皿の上の料理を取り分けていた彼は、鐘の音を聞くと黙って立ち上がり、今度は窓際のデスクに置かれている時計の針を直すのである。

時計の針を直すという事は、彼が単に几帳面な性格だということを示しているだけでなく、彼の人生が思うようにいかないものであることを象徴している動作であるようにも見える。こうすべき生き方やこうしたい生活というものがあったとしても、なかなか現実はその通りには行かず、少しずつずれてきたり、遅れたりしてしまうのが人生である。だが人生のずれは、時計の

針を直すように簡単には直せないものなのかもしれない。原作と同様、Crocker-Harris は、若き教師時代の経験を新任の Gilbert に話しているが、そこでもこうした理想と現実の人生のずれが語られている。

> Of course, from the very beginning, I realized I did not possess the knack of making myself liked, but...
>
> At the beginning, at least, I did try very hard to communicate to the boys, those boys sitting down there, some of my own joy in the great literature of the past. Of course, I...I failed as you will fail 999 times out of a thousand. But a single success can atone and more than atone for all the failures in the world. (22)

この後、彼は“a single success”を若い頃に経験したことがあると述べるのだが、彼の失敗の人生を贖ってくれる真の成功は、この後 Taplow 少年によってもたらされるのである。Taplow から古本屋で見つけた『アガメムノン』のブラウニング訳をプレゼントされ、ひそかに涙を流す場面では、演じる Michael Redgrave がそれまで抑えていた感情を緩ませつつも、決して涙を見せまいと抑えるデリケートな表情を見せている。The Crock も本当は人から好かれたいと思っていたのだ、と感じさせる瞬間となっており、stoic な生き方のつらさと一瞬の救いを伝える名演である。

映画はこの他にも、校長の訪問などの中程の場面がクリケット場での会話に移されていたりするばかりか、後半では校長夫人が Crocker-Harris 夫妻の送別会として催したディナー・パーティの場面があり、冷たい表情で花火を見上げながら話す夫婦の場面なども新たに用意されている。しかし、こうした場面では、場所は室外に置きかえられていても、セリフは原作からのものが中心となっている。映画が原作と明らかに違うのは、原作のラストで校長への電話で話されている翌日の終業式が、実際に映像化されている点である。映画では、Crocker-Harris の終業式でのスピーチを聞くことができるのである。

終業式でのスピーチ ～＜孤立＞＜抑圧＞を越えて

Geoffrey Macnab は、Asquith とラティガンが映画版で Crocker-Harris に与えたのは“self-knowledge”であるとしたうえで、原作にはない終業式のスピーチが語られる時には、彼が訳したギリシャ悲劇と同じ位に力強いカタルシス、すなわち精神の浄化があると指摘している。(23) 式の開始直前に Crocker-Harris は、やはり一番最後にスピーチをさせてくれと校長に耳打ちをする。迷った校長が結局、順番的にクリケット選手でもある人気教師の後に彼を紹介すると、次のように正直な心の内を披露して、反省と謝罪の言葉を述べ始めるのである。

> I’m sorry, because I have failed to give you what you had the right to demand of me as your teacher. Sympathy, encouragement and humanity.
>
> I’m sorry, because I have deserved the nickname of Himmler. And because, by so doing I have degraded the noblest calling that a man can follow. The care and molding of the young. I claim no excuses.
>
> When I came here, I...I knew what I had to do, and I have not done it. I have failed, and...miserably failed.
>
> But I can only hope that you and the countless others who have gone before will find it in your hearts to forgive me for having let you down. I shall not find it so easy to forgive myself. That is all. Good-bye. (24)

このスピーチの後、最初は静まり返っていた会場から拍手が起こり、次第に大きくなって万雷の拍手となり、場面は＜孤立＞や＜抑圧＞を克服し、＜理解＞と＜自立＞を得た瞬間へと変わる。この後、会場の外で Crocker-Harris は、若い頃に訳した『アガメムノン』のノートを Taplow から渡される。これは原作では出てこない物だが、映画では、それをこっそりと Taplow が持ち出し、ブラウニングの訳よりも良かったと感想を伝えて返すのである。

こうして Crocker-Harris は、Frank、Taplow の＜理解＞を得て、新たな＜自

立＞に至り、改めて“a single success”を得たのである。それは Winslow 家の裁判の勝利に比べれば個人的な小さな勝利にすぎないが、Asquith 監督は、そのラストに人間の運命に対する勝利を高らかに謳い上げたベートーベン交響曲の第 5 番の第 4 楽章を奏でている。そして自分の訳を手にして校庭を歩いていく教師の後ろ姿でエンド・マークとなっている。

Crocker-Harris 役の Michael Redgrave は、Alfred Hitchcock 監督英国時代の傑作 *The Lady Vanishes*（1938）や、Eugene O'Neill 原作の *Mourning Becomes Electra*（1947）等で知られている名優である。彼は *The Browning Version* の翌年に、まじめな教師役から一転して、同じ Asquith 監督の *The Importance of Being Earnest*（1952）で不まじめな紳士 Jack を演じており、一見同じ人とは思えないほどの変貌を見せている。*The Browning Version* は、カンヌ国際映画祭で評価され、Redgrave が男優賞を、ラティガンが脚本賞を受賞している。

3．映画 *Separate Tables*（1958）

第 1 部と第 2 部を同じ日の物語に再構成

最後の 1 本は、『旅路』の題名で日本では公開されたアメリカ映画 *Separate Tables* である。(25) 当時のスター俳優が顔を揃え、*Marty*（1955）でアカデミー賞監督賞受賞のアメリカ人監督 Delbert Mann が監督したこの映画は、第 31 回アカデミー賞で作品賞、主演女優賞（Sybil 役の Deborah Kerr）、脚色賞（Rattigan、John Gay 共同脚色）、撮影賞、音楽賞など計 7 部門でノミネートされ、主演男優賞（Pollock 役の David Niven）と助演女優賞（Miss Cooper 役の Wendy Hiller ）を受賞した。ここでは、①戯曲で 2 部に分れている物語の再構成　② Anne（Rita Hayworth）と John（Burt Lancaster）の描写 ③ラスト・シーンにおける銘々のテーブルを中心に見ていきたい。

今までの 2 作品の映画化が、原作の室内場面を屋外に広くオープンアップさせていたのに比べると、*Separate Tables* は、場所の拡大はホテルのフロン

トや応接室、テラスや庭など、建物の内外などのセットの中に留まっている。追加場面についても、前 2 作のように劇のスタート以前の日常や、新たなラスト・シーンやセリフなどが用意されているわけでもない。だがこの映画化が大きく原作と異なるのは、その劇構成である。

舞台では通常、第 1 部の“Table by the Window”と、休憩をはさんで第 2 部の “Table Number Seven” の 2 部構成の上演となる。第 1 部では、昔の夫 John Malcolm を求めて宿を訪れた Anne Shankland が、拒否されながらも、最後に彼の心を取り戻すまでを描いているが、映画では冒頭から、第 2 部のみの登場人物である Pollock 少佐や Sybil が登場する。原作では、第 2 部は第 1 部から 1 年半経っている設定だが、映画では 2 つの物語は同じホテル内というだけでなく、同じ日の出来事として、交互に描かれていくのである。

映画の最初のセリフは第 2 部の Sybil と Pollock 少佐の会話である。庭で Pollock と顔を合わせた Sybil は、少佐から軍人時代の自慢話を聞きながらホテルの中へ入るが、母親である Railton-Bell 夫人に彼に接近しすぎだと注意されてしまう。ホテルの中では、Miss Meacham が Fowler とビリヤードをしたり、Charles と Jean のカップルがラウンジで仲良く話をしていたりする。この若いカップルは戯曲の第 2 部では、結婚して赤ん坊を連れての滞在となっているが、映画の場合、未婚のカップルとして登場し、ラストの食堂のテーブルで結婚を決める会話を交わしている。戯曲と異なり、この二人は Pollock の事件に関する議論に加わることはない。映画での彼らの役割の一部は John と Anne に譲られていて、Pollock 少佐や Sybil を気遣う発言をするのは John であり、ラストで食堂で最初に Pollock に声をかけるのも彼になっている。手にけがをした Sybil の手当てをしてやるのは Anne に代っており、後に Sybil が Pollock から心の内を聞かされ動揺している時も、原作の Miss Cooper のセリフを譲られて、彼女に慰めの言葉をかけている。

Anne と John の描写

Anne が原作でその姿を初めて現わすのは、夕食に食堂に出てきた時なの

だが、映画では、高級な毛皮を身につけ、たくさんの荷物を運ばせてチェック・インする場面が最初の登場場面となる。戯曲の第 1 部は、この Anne と John の会話を軸として展開していくのだが、食堂での再会場面で John は Anne に対して、自分は昔、彼女に五針も縫う傷を負わせた野蛮な男で、その傷跡は今でも残っているはずだと話す。それに対して Anne は、時が経てば大抵の傷跡は消える、と過去のマイナス面には目を向けさせないように言う。だが映画では、Anne の方から殴られた傷がまだ残っていると話し、今回婚約者に会いにやって来たと嘘をつき、その彼は暴力など振わない、ときつい皮肉を言うのである。こういう皮肉や過去への言及は、John に昔の感情を甦らせようという彼女の必死の試みの一つであり、戯曲と比較すると、映画の Anne の方が John を取り戻したいという思いが強く描かれているように見える。

Anne が John の理解を得られずに怒りを買ってしまう場面が中程にあるが、戯曲ではラウンジでの会話が、映画では彼女の部屋に移されている。John が怒っている事をまだ知らない Anne は、一つ一つ部屋の明りを消していき、彼をベッドへ誘おうとするのだが、厳しい非難の言葉を浴びることになってしまうのである。その際に彼女は、顔を引き寄せられて小じわを指摘されてしまうが、暗くした室内の明りを再び John がつけて彼女の顔を照らすので、戯曲に比べてより残酷な印象を残す場面となっている。(26)

映画版ラストの銘々のテーブル

こうして原作にアクセントをつけた形で映画化されている二人の再会は、戯曲と同様に食堂で再出発のラストとなっている。だが残念ながら、原作のような John と Anne 二人だけの静かな余韻のようなものは、映画からは感じられない。原作が二人だけの遅い朝食で、ウエイトレスの出入りだけの場面になっているのとは異なり、Pollock 少佐の事件の場面と交互に場面が展開していき、ラストが翌日の朝食場面で重なっているためである。見る側の関心は、Sybil が母親を振り切り、自らの言葉を Pollock にかける方に傾いて

いると言えるだろう。

Sybil を演じている Deborah Kerr は、この映画の 2 年前には、ミュージカル *The King and I*（1956）で家庭教師を演じており、その際は Yul Brynner 演じるシャム王を相手に、毅然とした女性を演じ、主題歌“Shall We Dance?”に合わせて踊っていたが、ここでは正反対の性格の気弱な女性を熱演している。*Around the World in Eighty Days*（1956）などの主演として名の知れていた David Niven の場合は、役柄と風貌、雰囲気がぴったりと合っており、調子のいい事を話す快活な紳士役に見事にはまっている。

原作では、Pollock が夕食をとるかどうかの返事が最後のセリフになっているが、第 1 部に合わせて 2 日目の朝食の場がラストになっているので、出発用のタクシーが到着した事を Miss Cooper が Pollock に告げる。ここで Sybil が手にしているナイフとフォークを動かすのを止めて、Pollock の返事をじっと注目しているショットが入る。Pollock は、タクシーを帰すように Miss Cooper に頼む。すると今度は、昼食は定刻通りでいいかと聞かれる。「いつもの時間に昼食を。」と答える少佐。これを聞いて Sybil は安心したように、またナイフを動かし始める。するとカメラが食堂の銘々のテーブルから引いていき、窓の外からホテル全体を捉えるショットとなって、THE END となるのである。こうして若いカップルの結婚、元夫婦の再出発、互いに自立の道を歩む事を確認する男女二人、という形でそれぞれのテーブルの結末を最後に見せて映画は終わっているが、孤独のまま終わる人物もいる事を映画は忘れていない。他にも一人でいる滞在客はいるが、カメラが最後に捉えるのは、それぞれのテーブルの間を歩いて回り、最後に食堂の窓のカーテンをさりげなく開ける Miss Cooper なのである。

4. 主要 3 作品の再映画化

Separate Tables の映像としてもう 1 本貴重なのが、1983 年のアメリカのケーブルテレビ局で製作されたテレビドラマである。[27] *Midnight Cowboy*

（1969）でアカデミー賞監督賞受賞の英国人監督 John Schlesinger 演出によるこの作品は、若干の言葉の言い換えを除いて、ほぼ脚色、カットなしに映像化しており、ラティガンの台詞と俳優の演技で勝負の作品となっている。前半の Anne と John のカップル、後半の Sybil と Pollock 少佐の二人を同じ俳優（実力派の英国俳優 Julie Christi と Alan Bates）が演じ分けるという舞台の伝統も引き継がれている。主役の二人はケーブルテレビの番組に与えられるケーブルテレビ優秀番組賞で男優賞と女優賞を受賞。他には Miss Cooper を Chaplin の *Limelight*（1952）で若き日から世界に名を知られていたベテラン Claire Bloom が演じており、一人でありながらも自立した女性の魅力と寂しさを静かな中に表現している。

Mike Figgis 監督による *The Browning Version* の再映画化（1994）[28] は、戯曲 *The Dresser*（1980）で知られる英国人劇作家 Ronald Harwood が脚本を担当、現代を代表する英国のベテラン俳優 Albert Finney が Crocker-Harris に扮しているイギリス映画である。この映画では、町にある Frank の部屋を Millie が訪れ、彼に誘惑的に迫る場面や、学校の先輩にいじめられている Taplow が友達と共にいたずらで仕返しをする、というような新たな場面も描かれているが、主要な場面は、その多くを 51 年版の脚本に負っており、終業式では前作とほぼ同じスピーチが語られ、全員席を立っての拍手を受ける場面となっている。

だが、明らかに異なるのは、Greta Scacchi 扮する Millie の性格と行動で、いかにも気の強いといった感じの Millie ではなく、寂しげな表情を見せる Milllie で、彼女もまた孤立している人物である事が伝わってくる。終業式の当日に車で出発してしまう点は前作と同じだが、この映画の Millie は、夫のスピーチを伺いにこっそりと終業式に戻ってきて、彼の言葉に涙を流すのである。式の終了後に夫婦が再び別れの言葉を交わす切ない場面が、ラスト・シーンとなっている。

The Winslow Boy の再映画化（1999）は、アメリカを代表する劇作家の一人、David Mamet の脚色、監督によるものである。[29] 彼は *Glengarry Glen*

Ross（1992）など、自作の戯曲を自ら脚色した経験もあり、脚本家や監督としての仕事も少なくない。この映画では、48 年版のような前置きとしての家族の日常の場面はなく、一部議会の場面があるものの、裁判場面などは追加されていない。各場面は屋外にオープンアップしている場合も多いが、原作の流れにかなり沿った形で物語は進んでいく。

本作で Catherine を演じている Rebecca Pidgeon は、父娘ほど年の差があるが、Mamet 夫人であり、その弟の俳優 Matthew Pidgeon が弟の Dickie を演じているという家族キャストである。その他、*The Madness of King George*（1994）の狂った英国国王役が忘れ難い Nigel Hawthorne が父親役、そして Sir Robert Morton を *Emma*（1996）や *An Ideal Husband*（1999）などで注目されている Jeremy Northam が演じている。Morton と Catherine のラストシーンに、48 年版とほぼ同じ台詞が採用されており、“How little you know about men.”という最後の言葉を Jeremy Northam が口にするアップの表情で映画は終わっている。

こうして見てきたように、映画は映画独自の手法で、新たに俳優の名演を引き出し、＜孤立＞と＜抑圧＞の人生から＜理解＞＜自立＞に至る道のりをスクリーンの上で描いて、ラティガンの世界を表現してきた。この他にラティガン作品の映画化には、Vivian Leigh 主演の *The Deep Blue Sea*（1955）や、*The Sleeping Princess* を Marilyn Monrow と Laurence Olivier 主演で映画化した *The Prince and the Showgirl*（1957）、あるいは *Cause Celebre* のテレビ映画版（1987）などがある。ビデオや DVD が入手困難な作品も少なくないが、今回の主要 3 作品再映画化のさらに詳細な研究と共に、今後の研究課題としたい。

［注］

(1) 大笹吉雄（演劇評論家）の劇評（『朝日新聞』、2005 年、12 月 21 日夕刊）

(2) 『ウィンズロウ・ボーイ』（訳＝常田景子、演出＝坂手洋二、キャス

ト＝アーサー・ウィンズロウ（中嶋しゅう）、グレイス（中田喜子）、キャサリン（馬渕英里何）、ディッキー（佐藤銀平）、ロニー（渋谷圭祐）、ヴァイオレット（田岡美也子）、ジョン・ウォザーストーン（西川忠志）、デズモンド・カリー（大石継太）、サー・ロバート・モートン（大鷹明良）、女性記者（萩原利映）、カメラマン（藤本浩二）、2005年9月7日～18日、俳優座劇場

(3) 『ブラウニング・バージョン』（訳・演出＝鈴木裕美、キャスト＝アンドルウ・クロッカーハリス（浅野和之）、ミリー（内田春菊）、フランク・ハンター（今井朋彦）、ジョン・タプロウ（池上リョヲマ）、フロビッシャー校長（岡田正）、ピーター・ギルバート（佐藤祐基）、ギルバート夫人（一戸奈美）、2005年10月20日～30日、俳優座劇場

(4) テレンス・ラティガン作、鈴木裕美訳『ブラウニング・バージョン』（季刊『せりふの時代』、2005年秋、第37号、小学館）

(5) 『セパレート・テーブルズ』（訳・演出＝マキノノゾミ、キャスト＝アン・シャンクランド（神野三鈴）、ジョン・マルカム（坂手洋二）、シビル・レイルトンベル（山田まりや）、ポロック少佐（菅原大吉）、パット・クーパー（久世星佳）、モード・レイルトンベル（歌川椎子）、グラディス・マシスン（林英世）、ミーチャム（南谷朝子）、ファウラー（大家仁志）、チャールズ・ストラットン（奥田達士）、ジーン・タナー（木下智恵）、ドリーン（小飯塚貴世江）、メイベル（秋山エリサ）、2005年12月15日～23日、全労済ホール／スペース・ゼロ

なお、この年の6月には、劇団俳優座もLABO公演として『銘々のテーブル』（訳＝小田島雄志、演出＝原田一樹、6月19日～26日）を上演している。主なキャストは、ジョン（加藤佳男）、アン（早野ゆかり）、シビル（瑞木和加子）、ポロック少佐（荘司肇）、ミス・クーパー（天野眞由美）。俳優座5階の稽古場の狭い空間を利用し、観客の目の前にテーブルが並べられ、あたかもホテルの別のテーブルに座って見ているような臨場感が感じられた舞台である。

(6) この点については、公演パンフレットのインタビューでも、「つまり、夫がゲイではないけれど、ゲイ的な魂を持っていて、言ってしまえば性的活動が全然活発でない。だから子供を作らせてくれなかった。そういった恨みは、相当ミリーにあると思うんですね。夫としては、もっと崇高な愛、いわゆるアガペーな愛を全うしようとするわけですけど、エロスのほうを欲しい妻としては、浮気をくり返していく。」と分析している。しかし、「単純にアンドルウをゲイだとする事は、物語が枯れてしまうので避けるようにとした。」とポストトークで説明している。

(7) 「鼎談 Rattigan Festival 3 〜ラティガンまつりの総括、坂手洋二×鈴木裕美×マキノノゾミ」（自転車キンクリーツカンパニー『セパレート・テーブルズ』公演パンフレット）

(8) 「鼎談 Rattigan Festival, 坂手洋二×鈴木裕美×マキノノゾミ」（自転車キンクリーツカンパニー『ウィンズロウ・ボーイ』公演パンフレット）

(9) Geoffrey Wansell, *Terence Rattigan* (St. Martin's Press, 1997), p. 252.

(10) Terence Rattigan, *The Browning Version* in *The Collected Plays of Terence Rattigan, Vol. 1* (The Paper Tiger, 2001), p.396.

(11) *The Winslow Boy* (1948, UK), directed by Anthony Asquith, with Robert Donat (Sir Robert Morton), Cedric Hardwicke (Arthur Winslow), Marie Lohr (Grace), Margaret Leighton (Catherine), Jack Walting (Dickie), Neil North (Ronnie), and Frank Lawton (John Watherstone).

(12) 日本では劇場未公開で、ビデオ、DVD も発売されることなく現在に至っている。今回見ることができたのは、アメリカの Amazon.com のサイトで 2005 年に購入したアメリカ版のビデオだが、2006 年の時点では品切れの状態となっている。

(13) *The Browning Version* (1951, UK), directed by Anthony Asquith, with Michael Redgrave (Andrew Crocker-Harris), Jean Kent (Millie), Nigel Patrick (Frank Hunter), Brian Smith (Taplow), Wilfred Hyde-White (Frobisher), and Ronald Howard (Gilbert).

(14) Terence Rattigan, *The Browning Version* in *The Collected Plays of Terence Rattigan, Vol. 1,* (The Paper Tiger, 2001), p. 331.

(15) 同じ劇場の場面は後半にも用意されており、ミュージカル・レビューを再び若い二人と John の父親の 3 人が見ているが、観客からのリクエストに答えて、新聞を賑わしている“The Winslow Boy”の歌が即興で諷刺的に歌われだすと、John の父親は不機嫌に退場してしまうのである。

(16) *Ibid.,* p. 328.（ここは映画も戯曲のセリフと同じである。）

(17) *Ibid.,* p. 369.

(18) 映画オリジナルのセリフは、筆者が DVD より書き写したものである。

(19) *The Browning Version* (DVD, The Criterion Collection, 2005). この映画の DVD には、主演の Michael Redgrave がテレビ番組に出演して、作品や演技についてインタビューを受けた時の貴重な映像なども収録されている。

(20) 荒井良雄『イギリス演劇と映画』（新樹社、1982）、p. 132.

(21) *The Browning Version* (DVD), chapter 4.

(22) *Ibid.,* chapter 10.

(23) 評論家 Geoffrey Macnab が *The Browning Version* (DVD)付属のリーフレットに書いたエッセイよりの引用。

(24) *Ibid.,* chapter 15.

(25) *Separate Tables* (1958, USA), directed by Delbert Mann, with Deborah Kerr (Sibyl Railton-Bell), David Niven (Major Pollock), Rita Hayworth (Ann), Burt Lancaster (John), Wendy Hiller (Miss Cooper), and Gladys Cooper (Mrs. Railton-Bell).

(26) 序論でこの場面が *A Streetcar Named Desire* の Blanche と Stanley の場面に似ているというポストトークでの意見を紹介したが、映画化 2 つを比較すると、なおさら似ている感が強まる。映画で Blanche Dubois を演じていた Vivien Leigh は、*Separate Tables* の Anne の役を演じる予定であったという。だが、夫であった Laurence Olivier が監督を降りてしま

い、彼女も役を降りたというエピソードが伝わっている。なお、本論の映画のデータや情報は、インターネット上の最大の映画データベースである *The Internet Movie Database* (http://imdb.com)を参考にしている。

(27) *Separate Tables* (1983, USA [TV]), directed by John Schlesinger, with Julie Christie (Anne / Sybil), Alan Bates (John / Major Pollock), Claire Bloom (Miss Cooper) and Irene Worth (Mrs. Railton-Bell). 日本では未放映で、ビデオ、DVD としても発売、レンタルされていない。数年前に海外で購入したビデオを今回は鑑賞したが、現在は入手困難になっている。

(28) *The Browning Version* (1994, UK), directed by Mike Figgis, with Albert Finney (Andrew Crocker-Harris), Greta Scacchi (Laura), Matthew Modine (Frank), Julian Sands (Gilbert), Michael Gambon (Dr. Frobisher), and Ben Silverstone (Taplow). 日本では劇場未公開で、ビデオ発売とレンタルのみ。（邦題：『明日にむかって』）

(29) *The Winslow Boy* (1999, USA), directed by David Mamet, with Jeremy Northam (Sir Robert), Nigel Hawthorne (Arthur Winslow), Gemma Jones (Grace), Rebecca Pidgeon (Catherine), Matthew Pidgeon (Dickie), and Guy Edwards (Ronnie). ビデオ発売とレンタルのみ。（邦題：『5 シリングの真実』）